質的心理学フォーラム　2018 ● Vol.10 ● 24-32

質的心理学と意味，質的心理学の意味　論文

ブルーナーの方法
――「意味の行為」から「行為の意味」へ――

A Way of Bruner: From “Acts of Meaning” to “Meaning of Acts”

横山草介　東京都市大学人間科学部
YOKOYAMA Sosuke　Faculty of Human Life Sciences, Tokyo City University

キーワード：意味の行為，行為の意味，脈絡，志向性，解釈
Key words: acts of meaning, meaning of acts, context, intentionality, interpretation

ジェローム・ブルーナーと意味の心理学の展開

2016 年 6 月 5 日，アメリカを代表する心理学者の 1 人，ジェローム・ブルーナー（Bruner, J. S.）がその 100 年にわたる生涯を閉じた。晩年のブルーナーの心理学界に対する最大の寄与は，1980 年代に 1 つの契機を見るナラティヴターンの心理学における思想的礎を用意したことである（Bruner, 1985; 1986; 1990）。特に 1984 年の 8 月，カナダのトロントで開催されたアメリカ心理学会における基調講演の中で発表された「思考のナラティヴ様式」の考え方は，人間の行為や精神の有り様を文脈に依存して変化する意味の問題として捉え直すことによって，ナラティヴ心理学の展開を賦活することとなった（Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986; Murray, 2002）。また，1990 年に発表された「意味の行為」（Bruner, 1990）の考え方は，特定の文化的脈絡の中で生活する我々が，他者と共に平穏な生活を営んでいくために精神が果たし得る機能は何か，という問いの下に，人間の意味生成の原理と機能とを探求する必要性を訴えるものであった（Bruner, 1990; 横山 , 2018）。

このアイデアは文化心理学という呼称を伴って，人間の意味生成と意味使用に関わる問題を，人々が日常を営む文化的脈絡との関係において考察する研究を賦活することとなった（Cole, 1996; Geertz, 2001; 波多野・高橋，1997; 石橋，1997; 岩田，2008; Lutkehaus, 2008; Mattingly, 2008; Mattingly, Lutkehause, & Throop, 2008; Miller, 1999; Shore, 2008; Shweder, 1991; 2007; 2008; 田島，2000; Wertsch, 2008）。

このように概観してみるとき，我々は晩年のブルーナーの仕事の内に 2 つの学際的な研究の動向を見出すことができる。1 つ目の動向は，意味と精神との結びつきの問題を，個別具体的な個人の人生や私的体験と，彼らの語り出すナラティヴとの関係に焦点を当てて探求するナラティヴ心理学の展開である（Atkinson, 1995; Bhatia, 2011; Czarniawska, 2011; Gregg, 2011; McAdams, 1993; 2006; Monteagudo, 2011; Murray, 2002; Riessman, 2008; Schachter, 2012; Smorti, 2011; やまだ，2000; 2006; 2007）。例えば，やまだ（2000; 2006; 2007）はブルーナーの「意味の行為」を，経験を有機的に組織化し，意味づける行為として読解し，ナラティヴこそ，彼の言う意味の行為の媒体に他ならないと結論づけた。この読解は，人々の生きる人生や私的体験の意味を，物語を介して理解することに研究の目的を据える研究の 1 つの理論的足場として受容されてきた。

2 つ目の動向は，意味と精神との結びつきの問題を，人々の日常的な実践や行為と，当の実践や行為が為される文化的脈絡との関係に焦点を当てて探求する文化心理学の展開である（Cole, 1996; Geertz, 2001; 波多野・高橋，1997; 石橋，1997; 岩田，2008; Lutkehaus, 2008; Mattingly, 2008; Mattingly et al., 2008; Shore, 2008; Shweder, 2008; 田島，2000; Wertsch, 2008）。例えばギアーツ（Geertz, 2001）は，文化心理学の研究対象は，古参者にとっては既に共有されたものとみなされる意味の

ネットワークへの新参者の参与プロセスにあると主張する。そして，ブルーナーの文化心理学はナラティヴを介してこの参与プロセスの内実を問うものであるとした。

さて，晩年のブルーナーの仕事から引き出される2つの学際的な研究の動向を個別に辿ってみるとき，我々はそこに，複数の研究上の主題が絡まりあって存在していることに気がつく。本稿では個々の主題を区別して，それぞれ「意味の行為（acts of meaning）」と「行為の意味（meaning of acts）」という2つの概念によって整理する。「意味の行為」という概念は，ブルーナー（1990）の議論に基づくものであり，「行為の意味」という概念は論究の道具として本稿が独自に設定するものである。

論究に先立って2つの概念を要約しておくならば，「意味の行為」というのは，諸個人が生活の中で出会った出来事や体験を解釈し，理解可能にしようとする行為過程を指示する概念である。これに対し，「行為の意味」というのは諸個人が生活の中で出会った体験や出来事を，当人がどのように解釈し，理解しているか，という先立つ行為過程の結果を指示する概念である。

物事の成り立ちを考えてみれば明らかになるように，何らかの結果は，その生成過程の帰結として導出されるのが本来であって，結果だけ独立に存立するわけではない。このことを鑑みるならば，生成過程の検討を伴わない結果の検討がことの内実を十分に捉え得ないのと同様に，意味の行為の検討を伴わない行為の意味の検討もまた，ことの内実を十分に捉え得ないことになる。

このように考えるならば，我々の探求は，過程から導出される結果，行為から導出される意味というひと連なりの見通しを持って行われる必要がある。この探求を具体化するためにはまず，「意味の行為」と「行為の意味」とがそれぞれ何を指示し，また双方がどのような関係にあるのかを明らかにする必要がある。本稿ではこの問題を考えていくための1つの切り口としてブルーナーの仕事を頼りに論究を進めていく。

「意味の行為」から「行為の意味」へ

「心理学はその説明の体系において『意味を用いないで』おこうとする努力をやめるべきである」（Bruner, 1990, p.20）。このように訴えた心理学者がブルーナーであった。彼は1970年代の中頃から，人文学における解釈の技法を取り入れつつ展開を進めていた人類学や歴史学，社会学といった諸学の動向に注意を向けていた。そして，これらの諸学の知見を積極的に取り入れ，心理学の探求をより学際的なものにするとともに，当の探求に「解釈」と「意味」という概念を取り入れるべきことを主張した（Bruner, 1986; 1990; 1996）。この主張の背後には，20世紀の心理学研究の主要な方法論が長らく実証主義自然科学の方法論にのみ依拠してきたことに対する疑念があった。彼はこの疑念を起点として展開した学際的な気運を1956年に1つの契機をみる認知革命になぞらえて第二の認知革命として位置づけた（Bruner, 1990）。彼はこの第二の革命を次のように特徴づける。

> この革命は，人間の心理学の中心となる概念は，意味（meaning）にあり，意味の構成に関わるその過程（processes）とやりとり（transactions）にある，という確信によって鼓舞された。
>
> （Bruner, 1990, p.33; 強調原文）

この引用部において彼は，心理学の探求の中心に意味という概念を位置づけるべきことを主張するとともに，人間が意味をつくりだすプロセスについての探求を進めるべきことを訴えている。この主張の中に今日の質的心理学の展開と結びつく1つの宣言としてのルーツを見いだすこともできる。

ところでブルーナー（1990）は，上述の確信の基礎に2つの議論が関わっていることを指摘し，次のように書き加えている。

> ［人間の心理学の中心となる概念は，意味（meaning）にあるという］この確信は，2つの関連する議論に基礎を置いている。1つ目は，人間

を理解するためには，彼らの経験や行為が，彼らの志向的状態（intentional states）から，どのように形成されるのかを理解しなければならない，ということである。そして2つ目は，これらの志向的状態の形相は，文化のシンボル体系（symbolic systems of the culture）への参加を通してのみ具象化される，ということである。　（Bruner, 1990, p.33）

この引用部を読み解く際のキーワードとなるのが「志向的状態」と「文化のシンボル体系」という2つの概念である。志向的状態とは一言で言えば，心がなにものかに向かっている状態を総称する概念であり，ブルーナーは例として「何かを信じる」,「何かを求める」,「何かを目論む」,「何かに対して責任や義務を感じる」といった状態をあげている（Bruner, 1990）。また，ブルーナーが志向的状態の議論を展開するにあたって依拠した論客の一人，サール（Searle, 1997/1983）は志向性という概念について次のような定式化を行なっている。

志向性とは世界内の対象や事態に向けられ，あるいはそれらに関わり，あるいはそれらについて生じているような，多くの心的な状態ないし出来事の特性である……。たとえば私に信念があるとき，それはかくかくのものが，しかじかであるということについての信念でなくてはならず，私が恐れを抱いているときには何かを恐れ，何かが起こることを恐れているのでなくてはならない。私に願望があるのなら，それは何かをしようとする願望，あるいは何かが起こったり，それが実情であるべきことを欲する願望でなくてはならない。私に意図があるのなら，それは何かを行う意図でなくてはならない。　（Searle, 1997, p.1/1983）

志向性という概念について重要なことは，志向性は世界内の対象や出来事との関係において規定されるということである。要するに，志向性は何かについてのものである必要があり，何ものにも向けられていない状態は，志向的状態とは呼ばれない（Searle, 1997/1983）。

こうした議論を援用しながらブルーナー（1990）は，世界内の対象との関係において規定される多種多様な志向的状態こそが，人間の行為や経験の基点にあると主張した。では，我々の志向的状態の形相は如何にして自他ともに理解可能になるのか。ここに彼は文化のシンボル体系というキーワードを持ち込む。

人間の生活と，人間の心を形づくり，行為の基底にある志向的状態を解釈可能な体系の中に位置づけることによって行為に意味を与えるのは，文化であって，生物学的機能ではない。それを果たすのは，文化の有するシンボル体系に固有のものとして備わっている諸種の様式，たとえば，言葉やディスコースの様式，論理や物語による説明の様式，相互依存的な共同生活の様式といったものである。　（Bruner, 1990, p.34）

彼の議論に従うならば，文化の有するシンボル体系の中でもっとも有力な象徴媒体が言語である。いずれナラティヴ論とむすびつく議論の筋を鑑みても，彼の議論のアクセントはここにある。要するに，我々は自他ともに使用可能な文化的ツールとしての言語や記号を媒介にして，世界内の対象や出来事に向けられる多種多様な志向的状態に意味を与えるのである（Bruner, 1986; 1990; 1996; 横山，2015; 2016; 2018）。

だが，こうした論の展開に対し，ブルーナーの議論は言語という象徴媒体に関わる論考に過度に偏向しているのではないか，という批判は免れ得ない。そこで以下では，彼のかつての研究に依拠しつつ上述の議論に1つの拡張を試みておきたい。ここで言うブルーナーのかつての研究というのは，我々が世界内の対象や出来事についての理解を表象する仕方には3つの方法があるという主張を指す。

1つ目の方法は「動作的表象（enactive representation）」と呼ばれるもので，蝶々むすびをする，自転車に乗る，などのように特定の慣習的動作によって対象についての理解を表すものである。2つ目の方法は「図像的表象（iconic representation）」と呼ばれるもので，対象と類似するイメージを図像的に作り上げることによって，対象についての理解を表すものである。3つ目の方法

は，「象徴的表象（symbolic representation）」と呼ばれるもので，記号や言語の体系を媒介して対象との間に恣意的な指示関係を成立させることによって対象についての理解を表すものである（Bruner, Olver & Greenfield, 1966）。ブルーナーは，我々はこれらの 3 つの表象様式を併用することによって，世界内の対象や出来事についての自身の理解を互いに示しあっていると主張した（Bruner, 1996）。晩年，彼は当時の研究について次のように言及している。

> 人間が世界を表象する仕方には 3 つの方法がある。あるいは，もっと正確に言えば，我々が「現実」と呼ぶ経験や行為に内在する不変性を捉える方法は 3 つある。1 つ目は，動作によって，2 つ目はイメージを通して，そして 3 つ目はシンボル体系を作り上げることによって，である。我々は世界を習慣的な行為の中で表象し，図像の中で表象し，シンボルの中で表象する ……私は，発達的な基盤はともかくとして，3 つの表象様式の区別は，未だに有効なものであると考えている
>
> （Bruner, 1996, p.155）

さて，以上の議論を受けて我々は世界内の対象や出来事に向けられた多種多様な志向的状態を，動作によって（enactive），図像やイメージを通して（iconic），言語や記号の体系を介して（symbolic），他者に開示するとしよう。では，こうして表現された多種多様な志向的状態は，それらを受け取る者によって，どのように理解されるのか。ここに意味の問題が発生する。

ブルーナー（1990）の議論に従うならば，意味の理解の問題は，理解の対象となる行為や発話，出来事，志向的状態がやりとりされる脈絡の理解の問題と深く関わっている。この点についてブルーナーは次のように書いている。

> 我々が，ある法則化された方法で意味を解釈し，意味を生成することができるのは，我々が特定の意味が生成され，やりとりされるより大きな脈絡の構造と一貫性とを特定することができるその程度に依存すると私は信じている。
>
> （Bruner, 1990, p.64）

言葉を換えて言えば，我々の行為や発話，出来事，志向的状態の意味は，当の行為や発話，出来事，志向的状態がおかれる脈絡との関係に応じて規定される，ということである。このように考えるならば，対象の意味の理解は，対象がおかれる脈絡の理解を必要とする，と結論づけることができる。こうした議論を受けて，ブルーナーは次のように明言するに至る。

> 意味生成は，世界との出会いを「それが何についての出会いなのか」を理解するために適切な文化的脈絡に位置づけることに関わっている。意味は「心の中の」ものであるが，その起源と意義は，その意味が生成された文化の中にある。この意味の文化的脈絡への位置づけが，意味の交渉可能性や，意味の伝達可能性を根底で支えているのである。
>
> （Bruner, 1996, p.3）

では，上の引用部で言及されている「文化的脈絡（cultural context）」とは一体如何なるものであり，我々はそれらを如何にして把握するのであろうか。この問いに対して彼は，我々の日常生活の至るところに編み込まれた文化的脈絡はある種の規範性を有しており，それらは我々の日常生活の中で常識として感受される暗黙の規則として理解することができる，と応答する（Bruner, 1990; 横山，2015; 2016; 2018）。彼は我々の日常の至るところに張り巡らされたこのような規範的な通例性，言わば人々の間で機能する常識の心理学的な遂行を「フォークサイコロジー（folk psychology）」（Bruner, 1990, p.35）と呼んだ。さて，以上に要約される議論をブルーナーのテクストを引いて確認しておこう。

> 文化を志向する心理学がその中心に置くことは，行為と発話（ないし，経験していること）との間を取りむすぶ関係が，生活における日常的な行為の中で解釈可能であるということである。この心理学は，発話，行為，そして発話と行為とが生起する状況との間には公的に解釈可能な適合性があるという立場をとる。言うなれば，我々の発話

の意味と，我々が与えられた状況の中ですることとの間には同意された規範的関係（agreed-upon canonical relationships）というものがある。そして，このような関係が，我々が他者と共に生活していく，その仕方を統制しているのである。

（Bruner, 1990, p.19; 強調原文）

我々の行為や発話の意味は，我々の生活世界における特定の脈絡との関係において規定される。ここには，日常生活の特定の脈絡において，如何なる行為や発話が妥当なものとみなされ，如何なる行為や発話が期待され，如何なる行為や発話が当然のものと考えられているか，に関わる同意された規範的関係が機能している。日常の特定の脈絡における行為や発話の適切性と関連する同意された規範的関係の円滑な機能を前提することによって，我々は他者との共同生活を，その都度何もないところから組み立てていくのではなく，いつも通りのこととして，即時的に組み立てていくことができる。要するに，日常の特定の脈絡における行為や発話についての通例を，関わりをもつ他者との間にある程度共有されたものとして仮定することによって，我々は日々の実践を難なくこなしていくのである。

だが，行為・発話－脈絡－解釈の 3 項をむすぶ同意された規範的関係が破壊される事態も我々の日常には馴染みのものである。すなわち，常識や通例から外れる出来事に出会い，期待や想定を裏切る事態に遭遇するのが我々の日常の実態であろう。ここでは，対－他者関係における行為や発話に対象を絞って論じているが，同意された規範的関係の破壊，言わば常識の破壊に類する事態は，対－他者関係においても，対－環境関係においても同様に想定することができる。

さて，我々の精神はこのような同意された規範的関係の破壊，すなわち常識の破壊に戸惑うものの，当の不測の事態を何とか理解可能なものにし，平静を取り戻そうと運動をはじめる。ブルーナーは，我々の精神がこうして何らかの混乱状況を収束させ，平静を取り戻そうとする志向性の内実こそ，心理学がその探求の中核に位置づけるべき問いであると明言する。そしてここにこそ，心理学の探求に解釈と意味という概念を取り込むことの意義があると主張する。彼は先の引用部を次のように続ける。

さらに，ここには，これらの規範的関係が破壊された時に，常軌を取り戻すための交渉の手段もある。このことが，解釈と意味とを文化心理学の，あるいはあらゆる心理学，精神科学の中心的問題たらしめているのである。（Bruner, 1990, p.19）

日常の特定の脈絡における行為や発話の適切性と関わる同意された規範的関係の破壊に対する時，我々は戸惑う。だが，我々はその戸惑いをそのままにしておくわけではない。当の不測の事態を何とか理解可能なものにし，精神の平静を取り戻そうとする。ブルーナーは，同意された規範的関係の破壊に対した精神が，事態の収拾をはかり，平静をとり戻そうとするプロセスこそが，解釈と意味という概念を心理学研究の中核に位置づけることになると結論づけたのである（横山，2016; 2018）。

先ほど，対象の意味は，当の対象がおかれる脈絡との関係において規定されるという議論を展開した。この議論に依拠するならば，対象の意味が規定される手前で進行する行為は，対象の意味を規定する脈絡を探索する行為として定義することができよう。本論の主題に沿って言い換えるならば，ブルーナーの主張した「意味の行為」とは，同意された規範的関係，言わば常識の破壊に対した精神が，当の不測の事態を理解可能にし，平静を取り戻すことを可能にする意味の脈絡を探索する行為として定義し直すことができるのである（横山，2016; 2018）。

この一連の行為を，ブルーナーの主張の要点を捉え損ねることなく，解釈という言葉によって表現し直してもよいだろう。このように考えるとき，意味という概念は，解釈の先に展望される不確定性に基礎づけられるものとして理解することができる。では，ブルーナーの議論において，意味とは一体何を指示する概念だったのであろうか。

「行為の意味」の固有性と公共性

以上の論究において，我々はブルーナーの「意味の行為」を，対象の意味を規定する脈絡を探索する行為として定義した。そして当の行為をブルーナーの論旨を捉え損なうことなく，解釈という言葉で表現し直してもよいとした。では，意味の行為，すなわち彼の考える人間の解釈行為の帰結として導出される意味は，一体どのようなものとして理解すればよいのだろうか。本節ではこの問題を「行為の意味」とは何か，という問いに読み替えて論究を進める。

ブルーナーの意味の行為論についての我々の理解に基づくならば，当の行為の帰結として導出される意味は，特定の対象についての解釈の仕方が，当の対象がおかれる脈絡との関係において，自他ともに理解可能なものとして認められている状態において成立していると考えることができる。要するに，ブルーナーの考えを敷衍するならば，意味という概念は，我々が日常生活の中で出会う様々な対象や出来事を，特定の脈絡のもとに自他ともに理解可能なかたちで表象する機能をもつ媒体として定義することができる。

さて，意味という概念を上のように定義するとき，意味の固有性と公共性の問題をどのように理解すればよいのか，という問いが立ち上がってくる。要するに，個人的な意味と，公共的な意味との区別をどのように考えればよいのか，という問いである。ブルーナー自身は，両者の関係について明白な応答には及ばなかった。従って以下では1つの試論というかたちでこの問題に考察を加える。

自分自身にとっての個人的な意味というとき，ここでの意味は，過去から現在に至るまでの当人に固有の体験の来歴に照らして，何らかの対象や出来事を解釈した結果として得られるものと考えることができる。これに対し，対－他者関係における公共的な意味というとき，ここでの意味は，関わりをもつ相手との今，ここのやりとりの流れに照らして，何らかの対象や出来事を解釈した結果得られるものと考えることができる。

言葉を換えて言えば，対象の意味の規定に関わる問題は，一方では，諸個人に固有の個別具体的な体験の脈絡に照らした解釈に関わっており，他方では今，ここにおいて関わりをもつ他者との間で時々刻々と進行するやりとりの脈絡に照らした解釈に関わっているということができる。以上の論点は，我々は，対象の意味の規定に際して，複数の複雑に重なり合う脈絡を，いくらかのアクセントをつけながら参照することによって，その都度の意味を規定しているという事態を仮定させる。では，我々はこの複数の複雑に重なり合う脈絡を，実際の意味の規定に際して一体どのように参照するのであろうか。

1つ目の可能性は，対象の意味の規定に際して，かつて参照した脈絡を現時においても有効に機能するものとして，再参照するという考え方である。この場合，規定される意味の内実は，対象についてかつて達成された意味の内実と同様，あるいは類似のものとなることが仮定される。2つ目の可能性は，対象の意味の規定に際して，かつて参照した脈絡が現時においては有効に機能しないという判断のもとに，新たな脈絡を探索し，参照するという考え方である。この場合，規定される意味の内実は，対象についての新たな理解のかたちとして提起されることが仮定される。

以上の議論を整理しておくならば，我々が意味の規定に際して参照し得る脈絡には，(1) 諸個人に固有の個別具体的な体験の脈絡と，(2) 関わりをもつ他者との間で時々刻々と進行するやりとりの脈絡との大きく2通りの可能性を仮定することができるということである。また，意味の規定に際して我々が脈絡を参照する仕方には，(1) かつて参照した脈絡を再参照する場合と，(2) 新たな脈絡を探索参照する場合との大きく2通りの可能性があるということである。

残される探求課題は，我々が対象の意味の規定に際して参照する脈絡と，我々が当の脈絡を参照する仕方とが，実際の対象の意味の規定に際して，どのように絡み合っているのかを明らかにすることである。

「意味の行為」の媒体としてのナラティヴ

この残された探求課題にアプローチするための1つ

の手段として，以下ではブルーナーのナラティヴ論に焦点をあてる。ここまでの論究において我々は，対象の意味は，当の対象がおかれる脈絡との関係において規定されるという命題に依拠してきた。ついでこの命題を足場にして，ブルーナーの主張した「意味の行為」は，対象の意味を規定する脈絡を探索する行為として定義することができると結論づけた。意味は，この行為の先に展望される不確定性に基礎づけられた概念として理解することができる。そして，行為の帰結として導出される意味は，対象を特定の脈絡のもとに自他ともに理解可能なかたちで表象する媒体として定義することができるとした。

さて，上に述べた行為から意味へと連なるプロセスを，行為の水準へのアプローチと，意味の水準へのアプローチとを分断することなく理解するための方法として提案された概念がブルーナーにおいてはナラティヴであった。では，彼はナラティヴという概念を一体どのようなものとして理解していたのか。最晩年に発表された論文の中で彼は次のように書いている。

> 物語は，期待されていたことに対する，期待されていなかったことによる侵入を叙述する。物語は共有された通例性の破壊に関わっており，これらの破壊がどのようにして解決されるか，に関わっている。1つの物語は，その特徴として，共有された通例性としての，何らかの前もって予想される前提から始まる。そして，前提の破壊へと移っていく……そして，はじめの通例性を修復していくか，あるいは，新たな前提を作り上げるために取り上げられた主題を展開していく。そして最後に，1つの解決がもたらされる。
>
> （Bruner, 2008, p.36）

上の引用部にも記されているように，ブルーナーのナラティヴ論に一貫して示される主題の1つが，ナラティヴは，前提や常識，通例性の破壊を基点として展開するという考え方である。言葉を換えて言えば，ナラティヴは同意された規範的関係の破壊を契機として，当の不測の事態を理解可能にすることを目指して展開する。このプロセスを本稿の主題に照らして，我々が対象の意味を規定する脈絡を探索する行為，すなわち「意味の行為」として理解することに飛躍はないだろう。

そして，意味の行為の帰結は，当初の同意された規範的関係を修復するかたちで対象の意味を規定する方向か，あるいは，新たな同意された規範的関係を作り上げるかたちで対象の意味を規定する方向へと導かれることになる。あるいは前節で展開した議論に則して考えるならば，意味の行為の帰結は，かつて参照した脈絡を再参照するかたちで対象の意味を規定する方向か，新たな脈絡を探索参照するかたちで対象の意味を規定する方向へと導かれることになる。

こうしてブルーナーのナラティヴ概念は，対象の意味を規定する脈絡を探索する行為と，その帰結として導出される対象を特定の脈絡のもとに自他ともに理解可能なかたちで表象する媒体としての意味とを，ひと連なりのプロセスとして探求するための手段として位置づけられることになる。ナラティヴ概念についてのこうした考え方は，晩年のブルーナーの著述に繰り返し登場する。

> 生とは「いつもの人々が，いつものことを，いつもの場所で，いつもの理由からしている」ことである。この当たり前さの中に，破綻が生じる時，物語の豊かなダイナミクスの引き金がひかれる。つまり，その破綻にどのように対処し，その破綻をどのように引き受け，事態をどのように馴染みの平常へと取り戻すのか，といったダイナミクスである。
>
> （Bruner, 2002, p.89）

我々の日常生活の至るところに張り巡らされた同意された規範的関係が破壊される瞬間に，行為としてのナラティヴが発動する。ナラティヴのダイナミクスは，不測の事態にどのように対処し，当の事態をどのように理解し，どのように平静を取り戻すのか，といった問題をめぐって展開する。ブルーナー（1990; 1996; 2002; 2008; 2010）はこのダイナミクスを研究することこそが，我々の精神や行為の多様な有り様についての理解を目指す心理学が今まさに必要としている仕事であると明言した。「意味の行為」という主題と密

接に結びついた方法概念として提案されたナラティヴは，人間の精神や行為の多様なダイナミクスを理解するための手段としての位置づけを与えられていたのである。

だが，この議論にはいくつかの問題も残されている。そのうち，もっとも重要な指摘の１つが，言語，あるいはナラティヴという様式に表象されない「意味の行為」や「行為の意味」の問題をどのように取り扱うのか，というものである。

我々の日常における多様なやりとりの中には，言語を介さずに遂行される行為というものが疑いなく存在する。たとえば，身振りや手振り，表情，視線，姿勢といった身体的な動作を介して互いの意図をやりとりする場面を我々は容易に想像することができよう。また，我々が生活の中で出会う出来事の中には，言葉を介しての表現が困難な出来事というものが少なからず存在し得る。

では，言語を介さずに遂行される社会的なやりとりや，言葉によっては表現し得ないような体験といった場面において，意味の規定をめぐる行為過程や，その帰結としての意味は，一体どのようにして記述可能になるのか。仮に，当のやりとりや体験について，言語を介して改めて語り直してもらったとしよう。この時，言語を介さずに試みられた「意味の行為」と，言語を介して試みられた「意味の行為」とは，同じ行為過程及びその帰結を持つものとして理解してよいのか，あるいは異なるものとして理解すべきなのか。

我々の社会生活は言語のみに依拠して成立しているわけではないという事実に対する時，意味の規定をめぐる行為過程とその帰結に関わる問題は，より広範な人間の行為に関わる領域を研究の視野に捉えなければならなくなる。この時，過程から導出される結果，行為から導出される意味というひと連なりの見通しを有する研究の構想が改めて重要になってくるのではないだろうか。

引用文献

Atkinson, R. (1995) *The gift of stories: Practical and spiritual applications of autobiography, life stories, and personal mythmaking.* Connecticut: Greenwood Publishing Group.

Bhatia, S. (2011) Narrative inquiry as cultural psychology: Meaning-making in a contested global world. *Narrative Inquiry, 21*, 345-352.

Bruner, J. S. (1985) Narrative and paradigmatic modes of thought. *Learning and Teaching the Ways of Knowing, 84*, 97-115.

Bruner, J. S. (1986) *Actual minds, possible worlds.* Cambridge: Harvard University Press.

Bruner, J. S. (1990) *Acts of meaning.* Cambridge: Harvard University Press.

Bruner, J. S. (1996) *The culture of education.* Cambridge: Harvard University Press.

Bruner, J. S. (2002) *Making stories: Law, literature, life.* Cambridge: Harvard University Press.

Bruner, J. S. (2008) Culture and mind: Their fruitful incommensurability. *Ethos, 36*, 29-45.

Bruner, J. S. (2010) Narrative, culture, and mind. In D. Schiffrin, A. De Fina, & A. Nylund (Eds.), *Telling stories: Language, narrative, and social life* (pp.45-49). Washinton, D.C.: Georgetown University Press.

Bruner, J. S., Olver, R. R., & Greenfield, P. M. (1966) *Studies in cognitive growth: A collaboration at the Center for Cognitive Studies*. New York: John Wiley.

Cole, M. (1996) *Cultural psychology: A once and future discipline*. Cambridge: Harvard University Press.

Czarniawska, B. (2011) Narrating organization studies. *Narrative Inquiry, 21*(2), 337-344.

Geertz, C. (2001) Imbalancing act: Jerome Bruner's cultural psychology. In D. Bakhurst & S. Shanker(Eds.), *Jerome Bruner: Language, culture, self* (pp.19-30). California: Sage Publications.

Gregg, G. S. (2011) Identity in life narratives. *Narrative Inquiry, 21*, 319-328.

波多野誼余夫・高橋恵子（編）(1997) 文化心理学入門. 岩波書店.

石橋由美 (1997) 社会文化的アプローチを読み解く――ブルーナーの文化心理学をてがかりに. 心理科学, *19*(2), 32-48.

岩田純一 (2008) 文化的認知論――ブルーナー派のアプローチ. 田島信元（編）, 文化心理学 (pp.114-130). 朝倉書店.

Lutkehaus, N. C. (2008) Putting "culture" into cultural psychology: Anthropology's role in the development of Bruner's cultural psychology. *Ethos, 36*, 46-59.

Mattingly, C. (2008) Reading minds and telling tales in a cultural borderland. *Ethos, 36*, 136-154.

Mattingly, C., Lutkehaus, N. C., & Throop, C. J. (2008) Bruner's Search for Meaning: A conversation between psychology and anthropology. *Ethos, 36*, 1-28.

McAdams, D. P. (1993) *The stories we live by: Personal myths and the*

making of the self. New York: Guilford Press.

McAdams, D. P. (2006) The problem of narrative coherence. *Journal of Constructivist Psychology, 19*, 109-125.

Miller, J. G. (1999) Cultural psychology: Implications for basic psychological theory. *Psychological Science, 10*, 85-91.

Monteagudo, J. G. (2011) Jerome Bruner and the challenges of the narrative turn: Then and now. *Narrative Inquiry, 21*, 295-302.

Murray, M. (2002) Connecting narrative and social representation theory in health research. *Social Science Information, 41*, 653-673.

Polkinghorne, D. E. (1988) *Narrative knowing and the human sciences.* Albany: State University of New York Press.

Riessman, C. K. (2008) *Narrative methods for the human sciences*. London: Sage Publications.

Sarbin, T. R. (1986) The narrative as a root metaphor for psychology. In T. R. Sarbin (Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct* (pp.3-21). Westport: Praeger Publishers.

Schachter, E. P. (2012) "When possible, make a U-turn": Reflecting on 'the narrative turn', meaning, morality and identity. *Narrative Inquiry, 22*, 186-193.

サール, J. R. (1997) 志向性――心の哲学（坂本百大, 訳）. 誠信書房. (Searle, J. R. (1983) *Intentionality: An essay in the philosophy of mind.* Cambridge: Cambridge University Press.)

Shore, B. (2008) Spiritual work, memory work: Revival and recollection at Salem camp meeting. *Ethos, 36*, 98-119.

Shweder, R. A. (1991) *Thinking through cultures: Expeditions in cultural psychology.* Cambridge: Harvard University Press.

Shweder, R. A. (2007) An anthropological perspective: The revival of cultural psychology―Some premonitions and reflections. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.), *Handbook of cultural psychology.* NY: Guilford Press.

Shweder, R. A. (2008) The cultural psychology of suffering: The many meanings of health in Orissa, India (and elsewhere). *Ethos, 36*(1), 60-77.

Smorti, A. (2011) Autobiographical memory and autobiographical narrative: What is the relationship? *Narrative Inquiry, 21*, 303-310.

田島信元. (2000) 文化心理学の起源と展開（特集：文化心理学の展開）. 心理学評論, *43*, 1-7.

Wertsch, J. V. (2008) The narrative organization of collective memory. *Ethos, 36,* 120-135.

やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味――ライフストーリーの心理学. やまだようこ・江口重幸（編）, 人生を物語る――生成のライフストーリー (pp.1-38). ミネルヴァ書房.

やまだようこ (2006) 質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念――ナラティヴ・ターンと物語的自己. 心理学評論, *49,* 436-463.

やまだようこ (2007) ナラティヴ研究　質的心理学の方法――語りをきく (pp.54-71). 新曜社.

横山草介 (2015) ナラティヴの文化心理学――ブルーナーの方法. 質的心理学研究, No.14, 90-109.

横山草介 (2016) ジェローム・ブルーナーと「意味の行為」の照準――混乱と修復のダイナミズム. *Perspectives on "acts of meaning" postulated by Jerome Bruner: Dynamism of confusion and restoration.* 学位請求論文. 青山学院大学. https://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/18971/ 18971.pdf（情報取得 2018/8/20）

横山草介 (2018)「意味の行為」とは何であったか？――J. S.ブルーナーと精神の混乱と修復のダイナミズム. 質的心理学研究, No.17, 205-225.